

10 教科教育等の専門性

1 学習指導に当たっての心得

指導に入る前に、この単元で身に付けさせたい資質・能力は何か、評価場面と評価方法をどうするのか、どのような指導計画で迫るのか考えます。

学習指導は、教科等の目標の実現のために、精選され、構造化された教材を媒介とした教師の教授活動と、児童生徒の学習活動の相互作用によって成立するものです。したがって、児童生徒の学習意欲を高め、いきいきとした学習活動を展開するためには、次のことに留意する必要があります。

(1) 目標・内容の確実な把握

ア 学習指導要領の総則を確実に理解する。

イ 学習指導要領の各教科及び各学年の目標、内容を確実に把握するとともに、その系統化を図る。

ウ 目標の実現のため、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の観点にそって目標を細かく分析し、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にするとともに、児童生徒の能力を的確に判断し、指導に生かせるような評価方法等を工夫する。

(2) 児童生徒の実態把握

児童生徒一人一人の特性（家庭環境、健康、性格等）と学級の特徴を把握する。

(3) 指導改善のためのポイント（例）

ア 教材研究	単元や題材など内容や時間のまとまりを見通し、その中で育む資質・能力の育成に向けて、具体的な課題等を設定する。その課題等を解決するための適切な指導過程を構成するため、教材のもつ意味と構造を明らかにして、指導と評価の計画を立てる。
イ 評価	指導と評価の一体化について留意し、単元で身に付けさせたい資質・能力に照らして評価規準、評価方法等を明確にする。
ウ 発問	児童生徒の思考を促す場面を吟味し、主な発問をあらかじめ用意する。
エ 板書	板書の構成や配色等を考え、授業の流れや指導のポイントがよく分かるように計画を立てる。
オ ノート指導	児童生徒の考えをまとめる手段としてのノート指導や習熟を図るためのノート指導等、学年に応じ児童生徒が学習活動の中で使いやすいように工夫する。
カ 学習形態	児童生徒の思考を深めたり、資料やテキストを読み取ったり、考えたこと等を表現したりするために学習形態の工夫をする。
キ 各種資料	提示する資料のねらいを明確にし、児童生徒の実態に合わせたものを用意する。

(4) 教科指導等における ICT 活用

現在の学校においては、児童生徒一人一人が1人1台端末を利用できるようになるなど、ICT 環境の整備が進んでいます。児童生徒の発達段階や教科の特性に合わせて ICT を適切に活用することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善につなげていくとともに、指導者の負担軽減を図っていく必要があります。

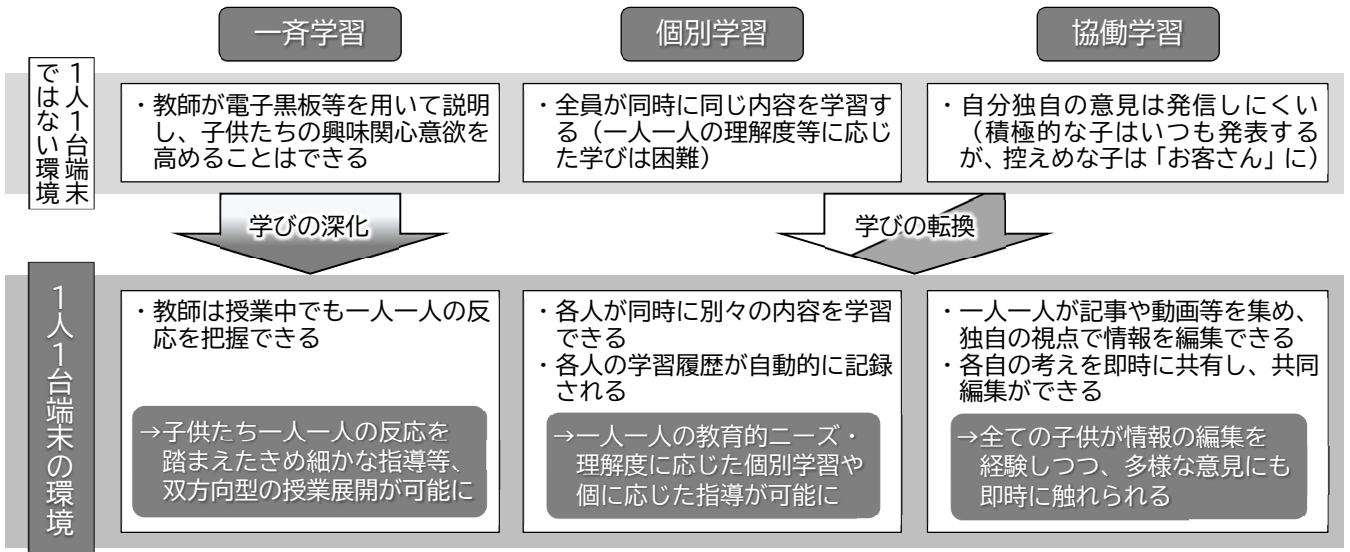
学習指導における ICT の活用を考えるに当たっては、ICT を活用すること自体を目的とするのではなく、また、「紙かデジタルか」という二項対立に陥ることなく、あるべき学校教育を実現するためのツールとして、ICT をこれまでの実践と最適に組み合わせて有効に活用するという観点が重要です。また、(3)に示した指導の方法を具体的に実践するに当たっても、児童生徒の学びの質の向上や指導者の負担軽減といった視点で ICT の活用を検討することが重要です。

◎ICT の特性や強みを生かし、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ること。

◎情報活用能力を発揮させ、各教科等における主体的・対話的で深い学びへつなげること。

◎情報技術を児童生徒が手段として学習や日常生活に活用できるようにするため、各教科等においてこれらを適切に活用した学習活動の充実を図ること。



ア ICT活用がもたらす学びの変容イメージ



イ 学習場面に応じた ICT 活用の分類例

(教育の情報化に関する手引 (文部科学省) より)



A 一斉学習	B 個別学習		C 協働学習	
A 1 教師による教材の提示  電子黒板等を用いた分かりやすい課題の提示	B 1 個に応じた学習  一人一人の習熟の程度などに応じた学習	B 2 調査活動  インターネット等による調査	C 1 発表や話し合い  考えや作品を提示・交換しての発表や話し合い	C 2 協働での意見整理  複数の意見や考えを議論して整理
B 3 思考を深める学習  シミュレーション等を用いた考えを深める学習	B 4 表現・制作  マルチメディアによる表現・制作	B 5 家庭学習  タブレットPC等の持ち帰りによる家庭学習	C 3 協働制作  グループでの分担や協力による作品の制作	C 4 学校の壁を越えた学習  遠隔地の学校等との交流

ICT を効果的に活用することにより、通常授業でも複数の学習形態を並行して進めることができます。






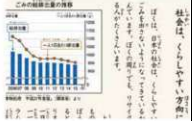
ウ 学習者用デジタル教科書の活用

活用自体を目的とせず、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の手段とする。

※学習者用デジタル教科書の活用による指導力向上ガイドブック (全体版)
https://www.mext.go.jp/content/20251017-mext_kyokasyo001-000030062_001.pdf



◆学習者用デジタル教科書を活用した学習方法の例

1 拡大 教科書を拡大して表示できる。 	2 書き込み 教科書にペンやマーカーで書き込みできる。 	3 保存 教科書に書き込んだ内容を保存・表示できる。 
4 機械音声読み上げ 教科書の文章を機械音声で読み上げることができる。 	5 背景・文字色の変更・反転 教科書の背景色・文字色を変更・反転することができる。 	6 ルビ 教科書の漢字にルビを振ることができる。 

2 指導技術のポイント

(1) 発問・指示・助言

授業の成否を決める大きなポイントの一つに、発問・指示・助言があります。授業は、教材を介して、教師の発問とそれに対する児童生徒の思考活動、指示に対する活動や作業等で構成されます。例えば、適度の難しさを含む発問は、児童生徒の思考を活発にしますが、意図の不明確な発問は、児童生徒の思考を混乱させます。

このように、発問の良否は目標の実現に大きく関わってきます。

【発問のポイント】

- ア 授業に臨むに当たって、意図の明確な発問を事前に準備する。
- イ 児童生徒の様々な考え（事柄・方法・理由等）やつまずきなどを引き出せるよう工夫し、誘導的な発問は繰り返さない。
- ウ 発問した後は、児童生徒に十分考えさせるための時間を保障する。
- エ 既習事項を踏まえた易しい発問から高度な発問へと、児童生徒の状況や授業の目標に応じて、系統的に構成する。

【指示のポイント】

- ア 指示は過不足のないように整理し、作業を始める前に順序よく的確に行う。作業を中断しての指示はしないように配慮する。
- イ 抽象的な言葉は避け、具体的な言葉を用いる。
- ウ 活動内容の難易度や発達段階に応じて、指示の出し方を工夫する。

【助言のポイント】

- 助言は、児童生徒の活動をよく見取った上で、つまずきへの対応や解決の方向の修正等、学習のねらいを達成するために必要な支援となります。
- ア 児童生徒のつまずきの状況により、全体への助言と個人への助言を区別する。
 - イ 発問の表現を児童生徒一人一人に応じた具体的なものにし、ヒントになるようにする。
 - ウ 児童生徒の心理状態を十分配慮し、主体的に取り組むことができるようにする。

(2) 机間指導

机間指導は、一人一人の児童生徒・小集団・学級全体の学習状況を見取り、適切な指導・助言を行い、効果的な学習活動が展開できるようにするために行うものです。

ICTを活用し、児童生徒一人一人の端末上の学習活動を手元の指導者用端末で見とることも考えられますが、その場合も、児童生徒のつまずきは表情や仕草から見取れることも多いことに留意する必要があります。

【机間指導のポイント】

- ア 指導計画に従い、一人一人の学習の実現状況、つまずき等を正確に把握し、必要に応じて記録します。
- イ 机間指導は、個別指導の大切な機会です。一人一人のつまずきに対する指導をすることはもちろん、教師と児童生徒との信頼関係を強める機会とします。
- ウ 個別指導をする際には、児童生徒と同じ目の高さにし、本人には聞こえるが、他の児童生徒には気にならないような声で話しかける等の細やかな配慮をします。
- エ 共通のつまずきや誤りを発見した場合には、適当な機会に全体の問題として取り上げて指導します。
- オ 予想される反応やつまずきを明確にし、指導する順番や質問の方法を決めておく必要があります。

(3) 板書

板書の良否は、教材研究の深さによって決まります。教材研究が十分なされていれば、教材のもつ構造が明らかになり、それを基に板書事項を構成することができます。教師は、板書を用いて学習のねらいや課題を明示する、あるいは文字や図・表など学習活動の資料を提供する等、児童生徒

の思考活動が促進されるように工夫します。また、その結果をまとめることもします。板書は、学習過程や授業の構造を明確にするためのものであると言えます。

なお、電子黒板やプロジェクターが活用できる場合、事前に準備できる板書事項はこれらの機器を使って児童生徒に提示し、手書きでの板書事項をより精選することも考えられます。

【板書のポイント】

- ア 板書事項を精選し、指導内容の中核となることを簡潔に表現するように努めます。学習指導案を作成する場合は、作成の段階で板書事項とその構成を計画します。
- イ 児童生徒は、板書に注目しています。いつ板書をするのかタイミングも大切です。
- ウ 正しい筆順で、誤字のないようにし、きちんと楷書で書くようにします。
- エ 教室内の誰からも見える大きさにします。
- オ 色チョークや枠取りで強調する等、変化をもたせます。その際、白色を基調とし、他の色は適宜使い分けます。「大切なことは赤色」、「新しく学んだことは黄色」のように、児童生徒と色の使い方を約束しておくことも大切になります。
- カ 学習内容に応じてカードや模造紙、小黒板、教具の利用や ICT 機器の併用等も考える必要があります。また、図・表や写真などの資料はクラウドに保存し、児童生徒が 1 人 1 台端末からアクセスして利用することも考えられます。
- キ 児童生徒の考えや解答が板書によって生かされる等、教師と児童生徒でつくり上げていく板書にすることも必要です。

(4) ノート指導

ノートは「学習の記録」です。学習の結果が記録されることはもちろんですが、学習の過程の記録（思考過程の記録）や習得に向けた練習の記録としても使われることが大切です。

ノート指導のポイントは、教科や学年によっても異なります。

また、児童生徒の発達段階や教科の特性によっては、手書きのノートのみならず、1人1台端末を活用した学習の記録を促すことも考えられます。1人1台端末を活用することは、指導者がノート回収・返却の作業を省略することが可能となるだけでなく、学びの観点からも、例えば児童生徒間での思考過程の相互参照が可能になるといった利点も考えられます。

【ノート指導のポイント】

- ア 教科の特性や学年に応じたノートを選びます。（罫の有無や間隔など）
- イ 初期の段階では、使い方の約束を決めておくことが大切です。また、慣れるまで書く練習をする時間の設定も必要です。
- ウ 定期的にノートを点検して、個別指導に生かします。記述の見本となるノートを、児童生徒に紹介することも大切です。
- エ 1人1台端末を活用したノート指導をスムーズに行うに当たっては、児童生徒の発達段階や教科の特性を考慮するとともに、事前にタイピングや図表の扱い方といった ICT 活用スキルを育成することが重要です。
- オ 学び合いやまとめ・振り返り等の際には、1人1台端末を活用して一覧表示や拡大表示によって共有することも効果的です。それらの資料等を電子データとして保存し、児童生徒が確認したり活用したりできるようにすることも大切です。

(5) 学習活動の工夫

児童生徒は、手でさわる・作る・書くなどの学習活動を好みます。そのような学習活動を取り入れることによって、意欲的に学習に取り組ませ、豊かな感覚の発達を促し、理解を確実にし、技能を定着させることが可能になります。

【学習活動の工夫のポイント】

- ア 活動のねらいを明確にし、授業の目標を児童生徒に意識させます。
- イ 児童生徒の実態に応じて、1人1台端末の活用も視野に入れながら適切な活動を選択し、十分な時間を取ります。特に活動に時間を要する児童生徒に対しては、細やかな配慮が必要です。
- ウ 活動を始める前に、活動の手順・方法等をよく理解させておきます。活動開始後は、時間を要している子に対する指導・支援に配慮します。

(6) グループ学習指導

グループ学習は、一斉学習や個別学習とは違った長所をもっています。少人数なので発言しやすい雰囲気になり、発言が積極的になる傾向にあります。協働で思考を深めたり、活動したりすることを通して、人間関係やコミュニケーション能力を育成できます。

【グループ学習のポイント】

- ア グループは、お互いに他人を尊重し合い、助け合う人間関係を大切にしておくことが求められます。平素から、この点について十分な配慮が必要です。
- イ 話し合いの目的に応じて、司会の仕方、話し合いの仕方等を理解させ、身に付けさせていくことが大切になります。
- ウ グループ編成は、目的や課題などによっては変えることも必要であり、能力・性格・興味・関心等を考慮して適切に編成する方法もあります。
- エ グループ間で、単に速さの競争になったり、結果の優劣の競争にならないように、目的に合った活動となるよう特に配慮する必要があります。そのためには、教師の事前の準備や活動のゴールの明示、活動中のグループへの指導が必要となります。
- オ 1人1台端末での共同編集ツールを活用したグループ学習により、協働的な学びを計画することも増えています。

3 教材・教具の活用

(1) 教材・教具の選択

児童生徒一人一人が活用できる ICT 端末のほかにも、現在、多くの教材・教具が市販され、学校にも整備されています。これらの教材・教具の選択に当たっては、教師個人の好みなどに偏ることなく、「この単元におけるこの学習にはどんな教具を利用すべきか」を幅広く考え、最適なものを選択することが大切です。なお、教職員全体や他の機関との協力も必要になります。

【教材・教具の選択のポイント】

- ア 指導目標に照らして、効果的であるもの。
- イ 児童生徒の発達段階や経験に応じているもの。
- ウ 思考や理解、概念形成を助長し、促進するもの。
- エ 興味や意欲を刺激するもの。
- オ 時間、費用、大きさ等の点で、指導計画の中に無理なく組み込めるもの。
- カ 安全についての配慮がなされているもの。

(2) 教材・教具の効果的な利用

ア 教育機器の種類

教育機器の分類の仕方は様々ですが、例えば次のようなものがあります。

(ア) 情報提供機器

プロジェクター、スクリーン、教材提示装置、電子黒板、大型ディスプレイ、ラジオ、テレビ、その他情報機器、デジタル投影機

(イ) 情報処理機器

校内 LAN 関連機器、プリンター、デジタルビデオカメラ、デジタルカメラ、イメージスキャナ、DVD 関連機器など

イ 教育機器の生かし方

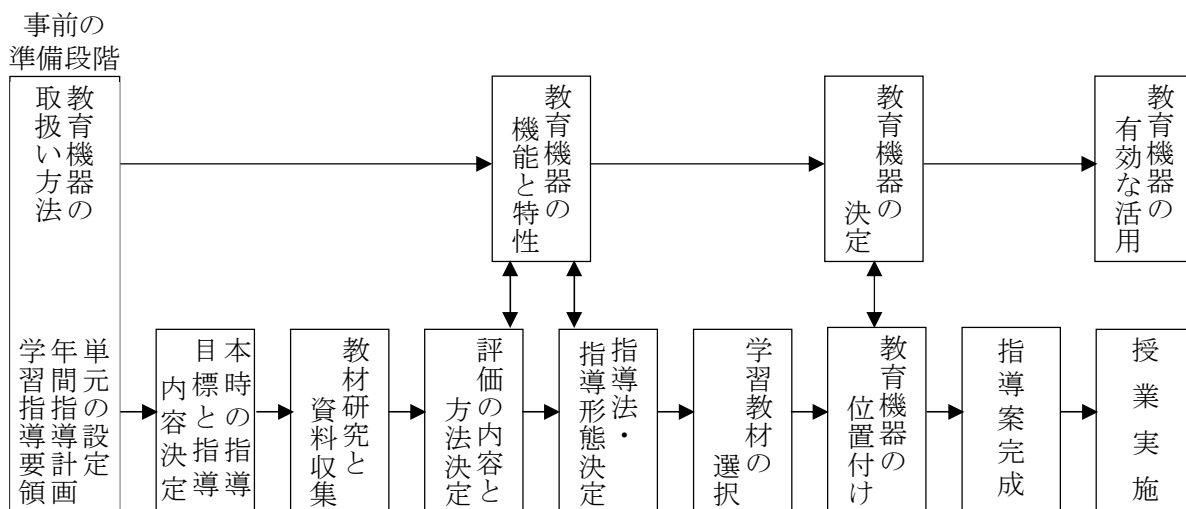
(ア) 教育機器の特性

教育機器は、それぞれ特色のある機能をもっています。機器の特性が生かせる場面で、特性

を生かす配慮のもとに使われることにより、学習者の能力を最大限に発揮させることができます。そのため、個々の教育機器の特性を十分に把握しておく必要があります。

(イ) 授業展開における位置付け

教育機器の特性を生かすためには、1時間の授業展開の中での機器使用のねらいや位置付けを明確にする必要があります。そのためには、授業設計の過程で次のような作業段階が考えられます。



4 家庭学習の在り方

児童生徒の学習内容の定着と学習意欲の向上のためには、授業と連動した計画的で効果的な家庭学習の充実が必要です。そのための有効な手立ての一つが「宿題」です。宿題を出す際には、児童生徒が「宿題はやらされるもの」として捉えてしまわないよう、学ぶ楽しさを実感できるような内容になるように工夫しましょう。また、学校では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し学習の楽しさを実感できるような授業を展開するとともに、帰宅してからも気になる内容を宿題として提供することや、一人でも学べるように学習の仕方を指導するなどして「家でも学習したい」という意欲を持たせることが大切です。1人1台端末を家庭学習の質を充実させる観点で活用することもできます。

■ 児童生徒の発達段階を考慮した家庭学習の内容の充実と習慣化

<具体的な取組のポイント>

- ◇ 家庭との連携を図りながら、宿題や予習・復習など家庭での学習課題を適切に課したり、発達の段階に応じた学習計画の立て方や学び方を促したりする指導の充実を図ること。
- ◇ 児童生徒一人ひとりの可能性を伸ばす観点から、家庭学習の内容については、画一的な取組に偏らないよう配慮するとともに、指導方法や指導体制を工夫改善し、ICT活用等、個に応じた指導の充実を図ること。
- ◇ 基礎的・基本的な内容の定着に向けた学習や、自主的・自発的な学習については、自ら目標を設定し、粘り強く実行し、内容や取組方法等を振り返って自己調整しようとする態度を尊重すること。